

教育実習を終えた学生の意識調査

教授 山下 哲
専任講師 尾辻 俊昭

平成18年7月の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」において、次のような大学における主な教職課程の課題が示されている。

- 1 学生に身に付けさせるべき最小限必要な資質能力についての理解が必ずしも十分でない。
- 2 教職課程の組織編成やカリキュラム編成が必ずしも十分整備されていない。
- 3 大学の教員の研究領域の専門性に偏した授業が多く、学校現場が抱える課題に必ずしも十分に対応していない。等

今後、教員の大量退職の時期を控え、全国的に教員採用者数の増加が見込まれる。教員採用選考を実施する都道府県では、いかに、高い資質・能力を有する新規採用者を選抜するかが課題となっている。特に大都市圏の学校では、ここ数年、40歳代の主任層といわれる教員が少なく、それ以下の若い教員の層と、50歳代後半の教員の層が厚いというアンバランスが起こっている。このため、各学校では、ベテラン教員の大量退職に伴う教育力の低下が懸念されている。近年、各教育委員会では、採用後も教員の資質・能力向上を図るための現職研修を長期にわたって実施している。今後、教職課程を有する大学では、これまで以上に即戦力としての力量を備えた学生を送り出すことが求められる。

今回の研究では、答申の課題の1に着目し、昭和音楽大学の資格課程として、学生に身に付けさせるべき資質能力についての理解を深めることを目標とした。そのために、教育実習の実態と効果についての調査を実施した。

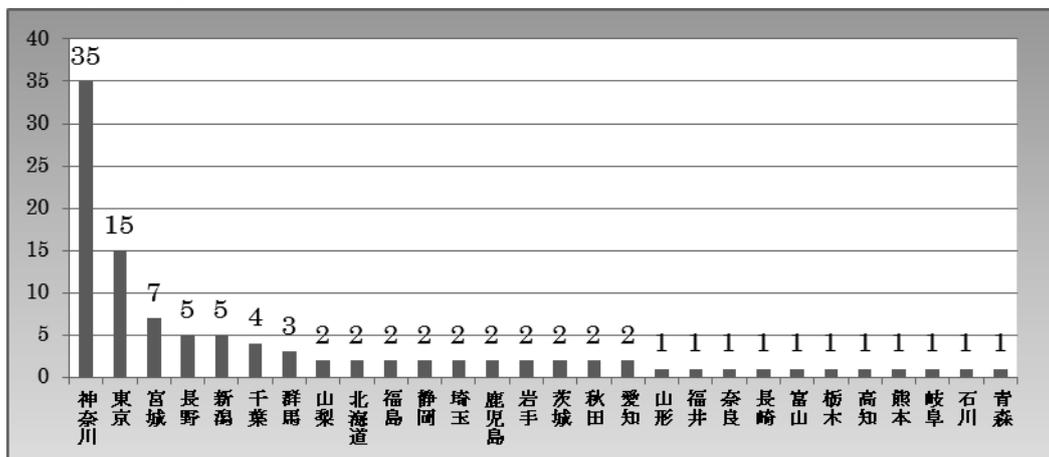
学生たちの教育実習後の記録や感想から、3週間にわたる実習で、様々な経験を経て、実習校の生徒たちから先生と呼ばれ、たくましく成長したことが伺える。教育実習の前後では、彼らの意識にどのような変化が起こったのだろうか。また、どのような能力が身に付いたのであろうか。さらに、彼らは実習校からどのように評価されたのだろうか。これらの点について明らかにしたいと考え、実習校からの評価報告書の調査、実習までの学生の成果の調査、実習後の学生を対象とした意識調査を実施した。

平成25年度 教育実習生 学部：105名（男性19名、女性86名）
短大：12名（男性1名、女性11名）
合計：117名 *他に科目履修生3名

教育実習先 中学校：学部91名、短大12名
高等学校：学部26名

実習校の都道府県別データは「表1」の通り

表1 実習校の都道府県別データ



【調査 I】

この調査では、昭和音楽大学の学生の実習先での評価について、実習校からの評価報告書を調査した。評価報告書には、1 性格、2 学習指導、3 生徒指導、4 教師としての資質の4項目にわたってA、B、C、Dの4段階で評価されている。

1 性格の項目では、さらに細かく、①礼儀作法 ②言語・態度 ③責任感の3つの細目。

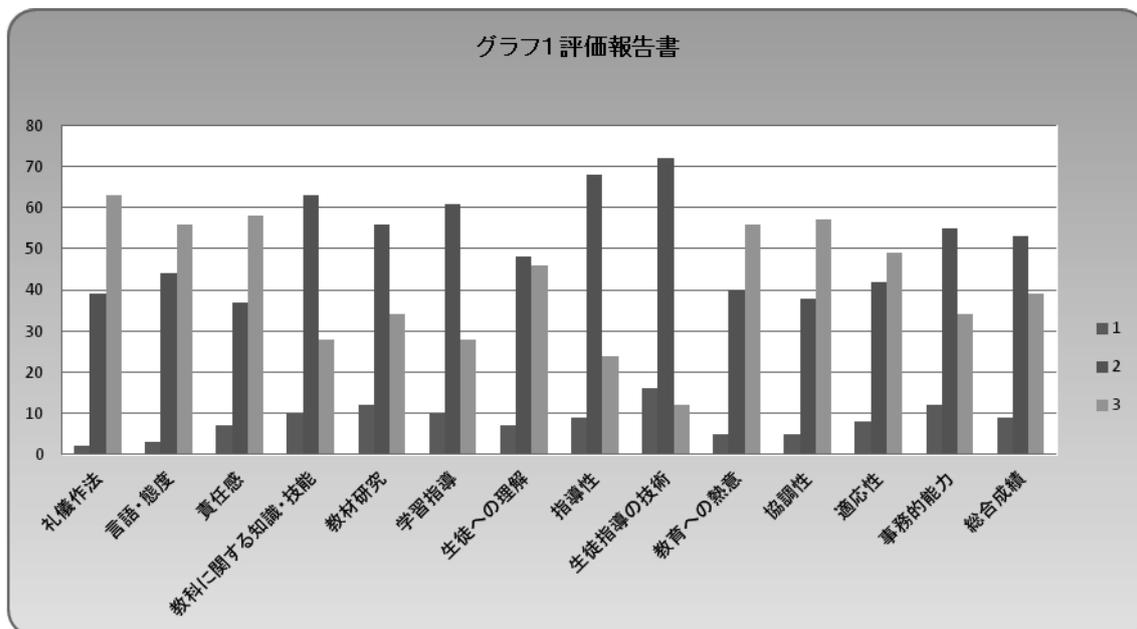
2 学習指導では、①教科に関する知識・技能 ②教材研究の能力 ③学習指導の能力の3細目。

3 生徒指導では、①生徒への理解 ②指導性 ③生徒指導の技術の3細目。

4 教師としての資質では、①教育への熱意 ②協調性 ③適応性 ④事務的能力の4細目。

全体で、13の細目に総合成績を加えて14細目が4段階で評価されている。A、B、C、Dを4、3、2、1に換算して調査分析を行うことにした。今年度はD評価がなかったため、グラフ化にあたり、A評価を3、B評価を2、C評価を1として示した。縦軸は人数、横軸は評価の細目である（グラフ1）。

最も高いA評価の多いのが、礼儀作法、次いで協調性、責任感、言語・態度、教育への熱意と続く。実習校のこのような評価は喜ばしいが、生徒指導についての項目にはC評価が多く、教科に関する知識・技能や学習指導の項目より多い。本学の学生は、指導教官や管理職等、教員からの態度等の評価は高いが、生徒指導について、今一歩という評価である。しかし、B評価の最も多いのが同じく生徒指導関連であり、それなりに学生は努力しているということが伺える。



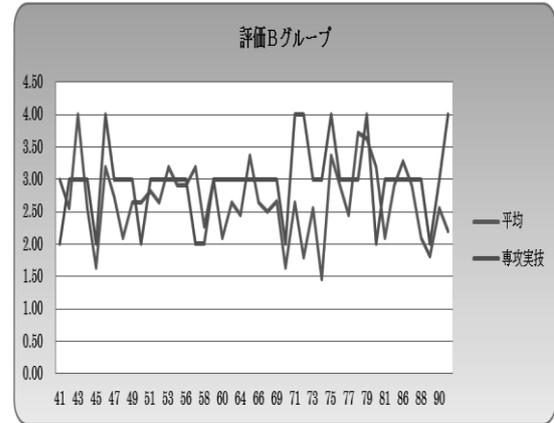
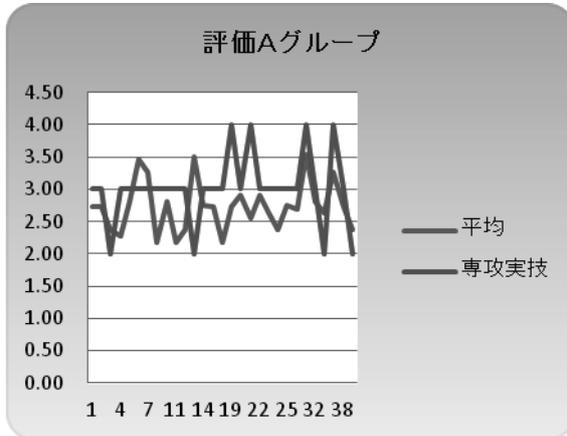
【調査Ⅱ】

この調査では、教育実習に行くまでの大学の成績と、実習後の評価結果との相関があるのかを調査した。このため、学生の1年次から3年次までの、教育実習前に履修すべき教職関連教科の評定を基に分析を行った。教育実習を終えた学生の、資格課程ハンドブック大学編12ページ短大編11ページにある教育実習のための要件①ア、イの教科の評価をポートフォリオから抽出した。学生の各教科の評定S、A、B、C、を4、3、2、1として平均を求めた。このデータと、実習校から実習後に送付されてきた評価報告書の総合成績の部分、今回はD評価がなかったため、A、B、Cを3、2、1、と3段階に換算した。

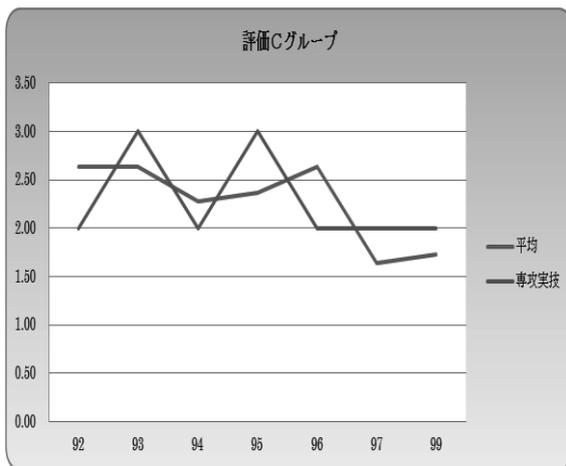
3週間にわたる教育実習では、多い学生で授業を20時間以上担当する。指導教諭の下とはいえ、授業ではピアノ伴奏や音取りなど、状況に応じた実技の能力が求められる。実習後にソルフェージュやピアノ伴奏が力不足であったと報告している学生や、実習前にピアノ伴奏等に不安を抱く声も聞かれることから、専攻実技の明確な声楽、器楽専攻の学生を選択し、実技の評価と実習校からの総合成績の評価との間に相関があるか調査した。実技の評価については3年次のものを使用した。

		実習校からの評価報告書の総合成績	教職教科の3年間の評定平均の平均	専攻実技の評定の平均
評価Aグループ	29名	3.0	2.73	3.0
評価Bグループ	44名	2.0	2.67	2.95
評価Cグループ	7名	1.0	2.27	2.29
合計	80名			

以下に、総合成績による評価グループごとのグラフを示す。なお、縦軸は評定、横軸は学生の整理番号である。



総合成績評価Aと評価Bのグループには、教職科目の平均評価と、専攻実技の評価の高い学生と低い学生が混在している。この2つの評価の高低が同一の学生で必ずしも揃っていないところが興味深い。



総合成績評価Cのグループは、教職科目の平均評価と専攻実技の評価が共に低い。これは、教育実習では、それまで身に付いた総合的な実践力が問われており、実習校もそこをしっかりと評価していることを物語っている。ただし、今回評価Cグループは7名と、サンプル数としては少数（8.8%）である。残りの学生は評価Aグループ及び評価Bグループに属していることから、評価Cグループの学生を除き、評価AグループとBグループでは、教職関連科目と実技科目の評価の高低は混在しており、教職関連科目と実技科目の評価と、

実習校からの総合成績の評価との間の相関は見いだせないという結論である。このことは、教育実習に行くための一定の基準を満たした学生の中に、評価の高低があるのは自然であるという結論である。また、どの学生も実習先では心機一転、できるだけ努力をしていると考えられる。

しかし、評価Cグループは8.8%ではあるが、教える側にとっては、この存在は深刻に受け止めるべきであろう。彼らは教育実習先でたまたま低く評価されたのではなく、総合的な力不足が評価されたと考えられる。今後、この評価Cグループの学生の割合が増加しないよう、注意して学生を育成することが大切である。

また、教職関連科目の評価の上位者が、必ずしも実習先での高評価ではないことも、また課題である。指導する側としては、教職関連科目の評価上位者が実習先から、同様に高評価を得られることを期待したい。今後は、教員免許取得から一歩進んで、採用試験合格

まで視野に入れて、準備段階で意欲にあふれた優秀な学生が、実習先でも高い評価を得られ、採用試験受験と合格につながるような見通しを持った指導が必要である。

【調査Ⅲ】

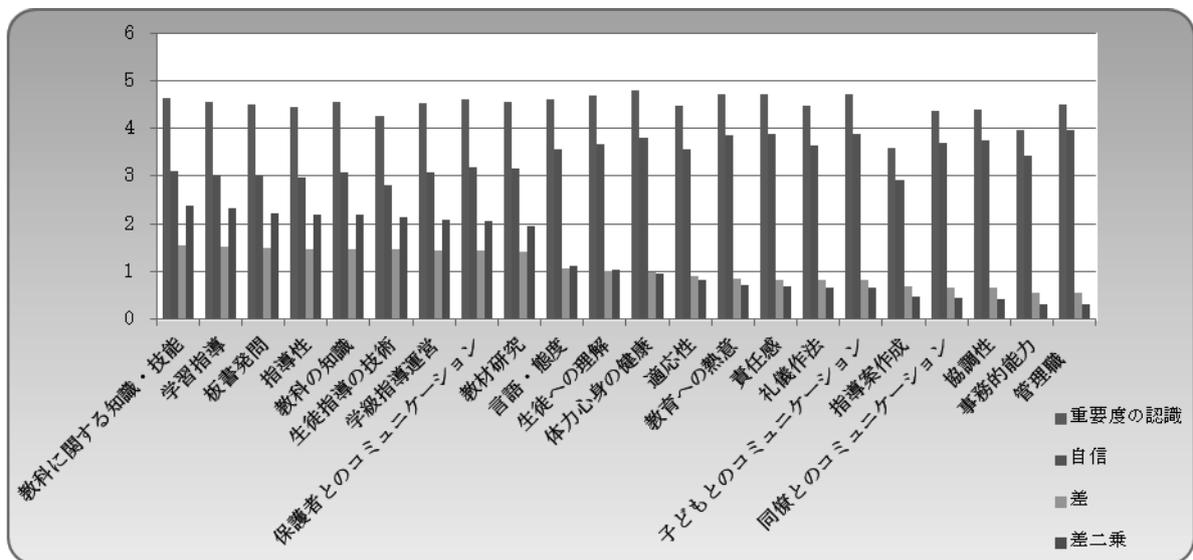
教育実習後に実施したアンケート調査の分析である。この調査では、22の項目を設定した。まず、それぞれの質問項目について、「どの程度重要と認識しているか？」5段階で回答させた。次に、同じ22の項目について、「自分でできると思いますか？」と自信の有無について5段階で回答させ、その差を分析したものである。この差は、重要と考えるが、自信はないという値であり、各22項目について、自信のなさを分析する。また、グラフ化にあたって、際立たせるために差を二乗した。

この調査の実施時期は、実習生として学校現場については体験済であり、それを踏まえての回答が期待できると考えた。22項目については、実習校からの評価報告書の4つの評価の観点を参考にして次の通り設定した。

- 性格のカテゴリー
 - 1) 礼儀・作法 2) 言葉・態度 3) 責任感 4) 教育への熱意 5) 協調性 6) 適応性
- 教科指導についてのカテゴリー
 - 7) 教科に関する知識・技能 8) 教材研究の能力・技能 9) 学習指導の技術・態度
 - 10) 指導案作成の能力 11) 教科内容についての十分な知識 12) 板書・発問・応答力
- 生徒指導のカテゴリー
 - 13) 子供とのコミュニケーション力 14) 学級指導運営力 15) 生徒への理解度
 - 16) 指導性 17) 生徒指導の技術
- 教師としての資質・その他のカテゴリー
 - 18) 事務的能力 19) 保護者とのコミュニケーション 20) 同僚とのコミュニケーション
 - 21) 管理職との関係 22) 体力・心身の健康

「重要であるか？」という質問には、学生は22項目いずれも概ね重要と考えている。あらかじめ重要と考えられる項目を設定しているため、自然と回答は高評価となる。しかし、同じ項目について、「自信があるか？」という質問には、教育実習後の調査ということもあり、彼らの経験に基づいた回答であると考えられる。グラフは、差の値の大きな順にソートして示した。

まず、教科に関する知識・技術の項目が、最も自信のない項目として挙げられている。これは実習校からの評価報告書（調査Ⅰ）でも高順位である。次いで、生徒指導の技術、学級指導運営、保護者とのコミュニケーションと続く。後半の差の二乗が差を下回るところから、自信が伺えてくる。適応性、教育への情熱、責任感、子供とのコミュニケーションと続く。礼儀作法や教育への熱意、管理職との関係、他の教員とのコミュニケーション、協調性などについては、実習校からの評価報告書に近い結果となっている。



調査を通して本学生の特徴は、態度や言葉使い、協調性など人物的な部分の評価が高い。また、学生たちも、ある程度の自信を得て、実習を終えたことを物語っている。しかし、教科指導についての知識・技能に関しての自信のなさは気になるところである。今後は、教科指導法の根本的な力量を担うピアノ、声楽、ソルフェージュ等の音楽実技のより一層の養成方法を探る必要がある。そのためには各科コースの担当者との連携を模索することが必要であろう。

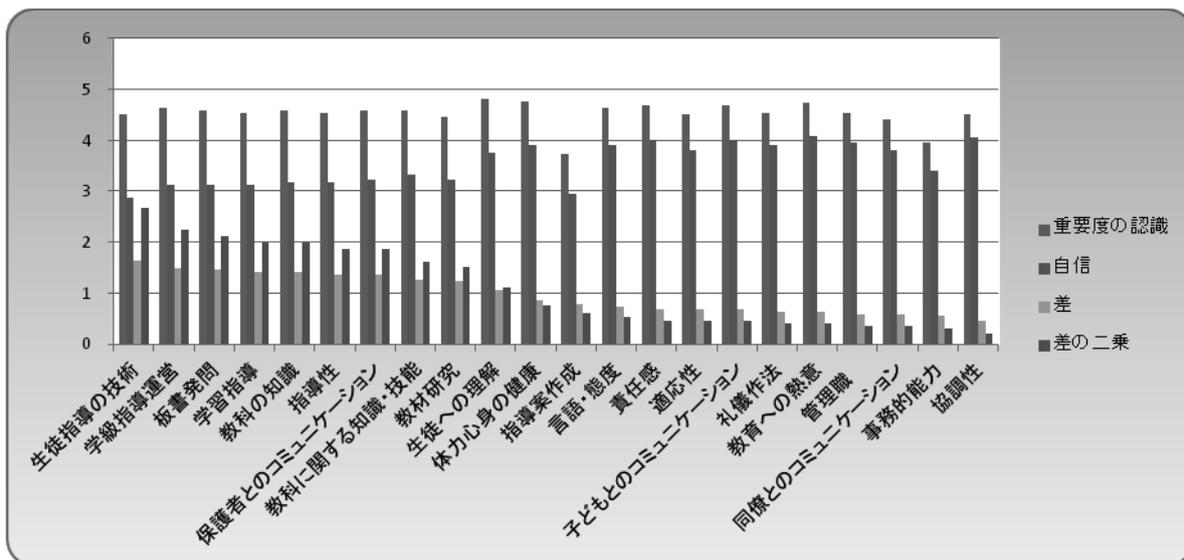
また、生徒指導関連に自信がないとの回答には、彼らの正直さが表れている。どこの実習校でも程度の差こそあれ、生徒指導には困難が伴い、教員は、その対応に苦慮しているのが実態である。教育実習生として、それを見聞してきた彼らが、生徒指導は大変であり、自信がないと回答したのは当然である。今後、この経験が、教職への志望をより強く抱く契機となることを期待したい。

今年度から、後期の教職実践演習において、教職の現実に触れさせるべく、全学生に定時制高校の一日体験を課している。様々な厳しい状況の中で、懸命に学ぶ高校生や、一人ひとりの生徒に、きめの細かい粘り強い指導をしている教師の姿を見て、ここに学校教育の一つの本質を感じ取って、教職への決意を新たにしたいという願いが込められている。今後こうした体験活動を充実させていくことが必要であると考えられる。

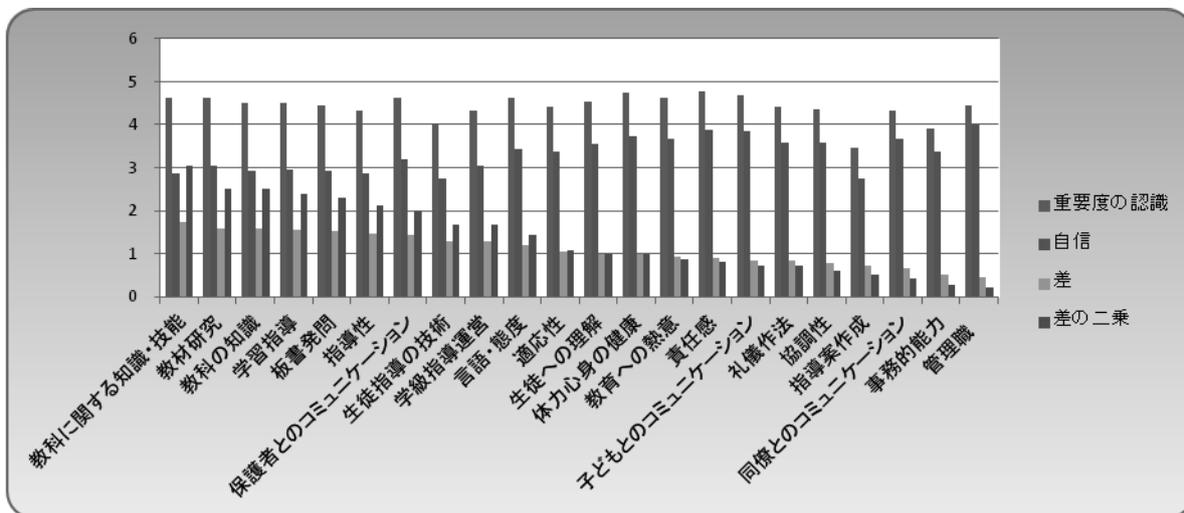
本学の近隣の教員採用選考は、教育実習の直後の7月20日前後に第一次選考、8月中に面接選考、9月初旬に実技選考が行われる。教員採用選考の合格を目指すには、教育実習前から受験の準備をすることが必要である。ここ数年、学部短大合わせて120名前後の学生が教員免許取得を目指している。中には、受験する都道府県を決めて合格を目指して準備を進めている学生も散見されるが、卒業年次の夏に採用試験に合格し、卒業後任用に至る学生は、ごく少数である。一人でも多くの教員志望の学生を、4年次在学中に教員採用選考に合格させ、4月から教職に就くためには、教育実習に行く前から時間をかけて、教職への動機付けを行う必要があると考える。また、教職関連科目の指導内容・方法をより採用選考合格を目指したものにする必要がある。

今年度教育実習を修了した学生の中で、教員志望を明確にしている学生は27名である。ここで、調査Ⅲの結果を教員志望の学生27名と、その他の学生に分けて比較したのが次の結果である。

<教員志望グループ>



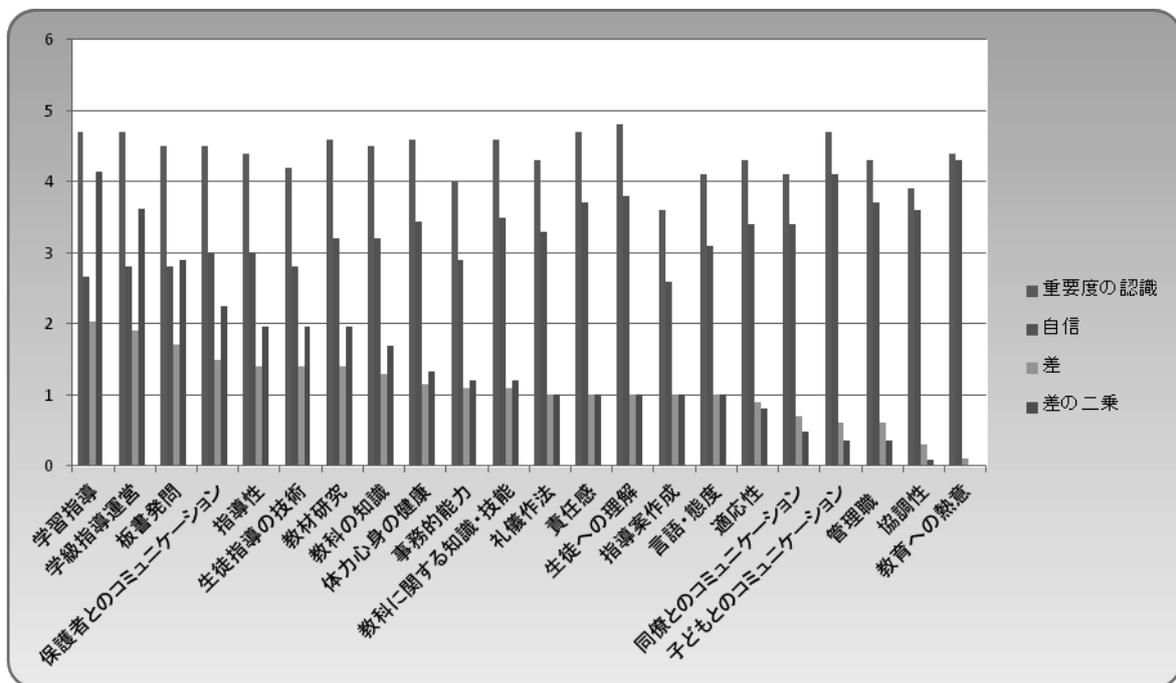
<その他のグループ>



教員志望グループが、最も自信がないと回答している項目は、生徒指導の技術、学級指導運営である。その他のグループでは、教科に関する知識・技能、教材研究、教科の知識と続く。ここから、教職を志望しているグループは、教科や授業への関心が高く、ある程度準備をして、自信をもって実習を終えたことが伺える。また、授業には自信をもって臨

むことができたが、生徒指導については、教員を志望している学生故の意識が高いのか、自らの足りなさや学校現場の厳しさに気付いて回答していると考えられる。

今回の調査では、短期大学部の学生は12名とデータ数が少なく、学部生との比較は難しい。入学して次年度に教育実習を実施するため、時間的余裕は少ない。また、実習前に修得すべき教職関連科目は、学部生と異なっている。次に、短大生の意識を学部生と比較した。以下のグラフは教育実習後の短大生2年生12名の調査Ⅲである。学部生と異なるところは、学習指導と学級指導運営の両項目に重要とは認めながらも、自信のなさが伺える。しかし、注目すべき点は、教育への熱意の項目に関しては、学部の学生に比べて圧倒的に重要度と自信の差がない（つまり自信がある）ということである。12名という少ないサンプル数とはいえ、入学して翌年には教育実習を行うという期間の短さが、教育への期待や熱意の維持という結果となって表れているのではないか。



【調査Ⅳ】

この調査では、次の項目について自由記述での回答を求めた。

- ①「あなたが教員になったとして、自分の長所・強みを活かせる場面は何だと思いますか？」
- ②「あなたが教員になったとして、自分の短所・足りない部分、苦手な場面は何だと思いますか？」

(いずれも、箇条書きで3点まで自由に回答させた。)

自由記述の回答数、長所に関するもの短大計 21、学部計 152、短所に関するもの短大計 19、学部計 159 である。学部の回答数が多いため、短大と比較して多様な記述を含んでい

る。これらの記述を「性格」「学習指導」「生徒指導」「教師としての資質」の4つに分類した。

この調査IVでは、短大生の特色を明らかにすることに主眼を置いて、学部生との比較分析を行った。

<短大生の長所について>

短大生が「長所」として回答した数は、計21である。

○ 生徒指導

「生徒とのコミュニケーション」「人の話をじっくり聞ける」「誰とでも分け隔てなく接することができる」に「行事」、「部活動」に関する記述を加えて、生徒指導に関する内容を長所と回答した数が回答数の53%である。

○ 性格

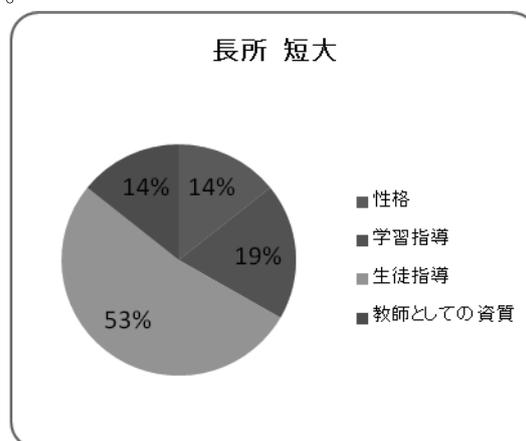
「陽気で朗らか」「好奇心がある」「前向き」など、性格に関わる内容を長所と回答した数が回答数の14%である。

○ 学習指導

「学習指導の技術」「教科に関する知識・技能」「授業全般」「専門性」など、学習指導に関わる内容を長所と回答した数が回答数の19%である。

○ 教師の資質

「柔軟」「教えることが好き」など、教師の資質に関する内容を長所と回答した数が回答数の14%である。



<学部生の長所について>

学部生が「長所」として回答した数は、計152である。

○ 生徒指導

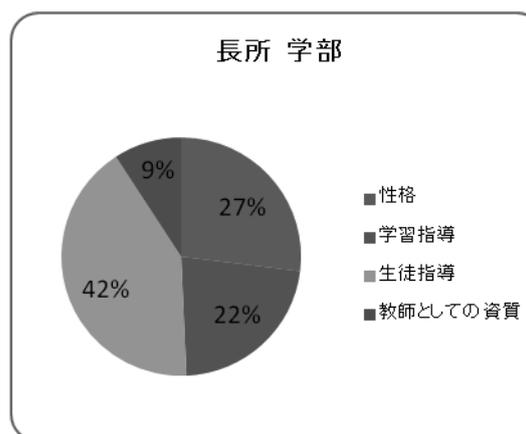
「生徒とのコミュニケーション」に関する内容。これに加えて、「生徒理解」「注意しかる」など、生徒指導に関する記述を加えて、生徒指導に関する内容を長所と回答した数が回答数の42%である。

○ 性格

「性格」「学習指導の技術と態度」「生徒指導の技術」「協調性」「広い視野」など、性格に関する内容を長所と回答した数が回答数の27%である。

○ 学習指導

「知識が豊富」「授業全般」「授業研究」など、学習指導に関する内容を長所と回答した



数が回答数の 22%である。

○教師の資質

「協調性」「広い視野」「事務仕事」など、教師の資質に関する内容を長所と回答した数が回答数の 9%である。

<短大生の短所について>

短大生が自身の「短所」として回答した数は、計 19 である。

○生徒指導

「生徒指導」「注意しかる」「まとめる」など、生徒指導関連の内容を短所と回答した数は回答数の 37%である。

○性格

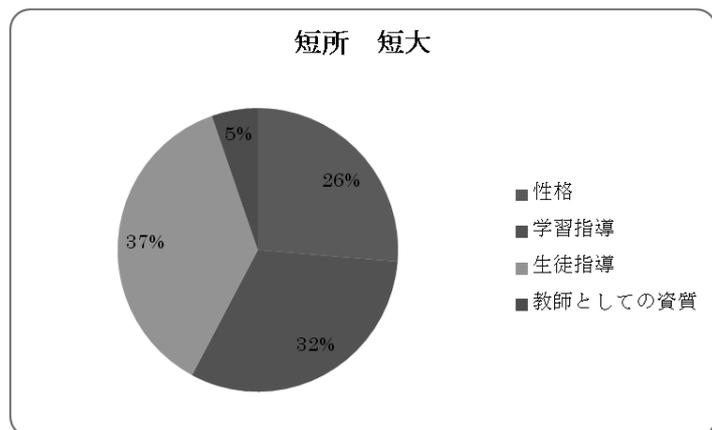
「自信がない」「経験不足」「消極的」「感情的」など、性格に関する内容を短所と回答した数は回答数の 26%である。

○学習指導

「知識」「指導案」「指導力」「ピアノ、歌、専門技術」など、学習指導に関する内容を短所と回答した数は回答数の 32%である。

○教師の資質

「体力」など教師の資質に関する内容を短所と回答した数は回答数の 5%である。



<学部生の短所について>

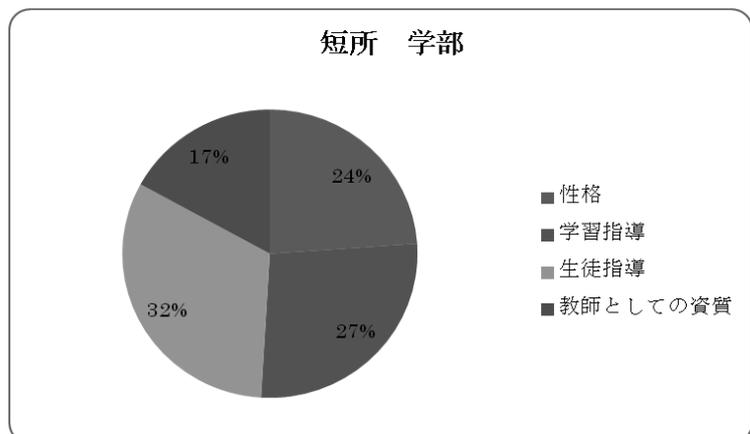
学部生が自身の「短所」として回答した数は、計 159 である。

○生徒指導

「生徒コミュニケーション」「生徒理解」「生徒指導」「注意しかる」「学級運営」「保護者対応」など生徒指導に関する内容を短所と回答した数は回答数の 32%である。

○性格

「声掛け言葉使い」「人前が苦手」「自信がない」「優柔不断」「感情的になりやすい」など性格に関する内容を短所と回答した数は回答数の 24%である。



○学習指導

「音楽的知識」「指導案」「授業の組み立て」「指導力」「ピアノ、歌等専門技術」など、学習指導に関する内容を短所と回答した数は回答数の27%である。

○教師の資質

「協調性」「事務作業」「体力」「一般教養」など、教師の資質に関する内容を短所として回答した数は回答数の17%である。

<短大生と学部生の長所の比較>

短大生と学部生の長所についての比較で、まず気が付くところは「教師としての資質」についての割合、短大生14%学部生9%の部分である。具体的な回答では「教えるのが好き」という「教育への熱意」に関する回答が全21回答の中、2回答あり、このため割合が高くなっている。学部生では、この内容の回答は全159回答の中、0である。

「生徒指導」についての割合は、短大生53%学部生42%である。特にこの中の「生徒とのコミュニケーション」が長所であると回答する短大生42.9%であるのに対し、学部生は21.1%である。この回答が「生徒指導」の結果に表れている。

「性格」についての割合の比較では、学部生27%短大生14%であるのは、総回答数の多い学部生の回答に多様な回答の割合が多かったと考えられる。

「学習指導」については、学部生22%短大生19%で、ほぼ同じ割合である。

<短大生と学部生の短所の比較>

顕著なのは、「教師としての資質」についての割合が、短大生5%学部生17%の部分である。具体的には、短大生は「体力」に関する回答数1のみであるのに対して、学部生は「協調性」「事務作業」「一般教養」などの回答27となっている。ここでも短大生の「教師としての資質」に対する自信が伺われて注目される。

「生徒指導」についての割合は、短大生37%学部生32%「性格」についての割合は、短大生26%学部生24%、「学習指導」については短大生32%学部生27%である。この3項目については値が接近していることから、短大生と学部生の大きな隔たりはみられないと考えられる。

調査Ⅳのその他の自由記述欄から、短大生の記述を拾ってみると、「短所を克服するために努力しようと思うこと」では、自信のなさや経験不足に対しては、「たくさん勉強する」「短大は、学部の人より勉強する時間が少ないので個人でやる」「先輩の体験談を聞く、様々なことを経験しようとする」「いろんな人とコミュニケーションをとる」また、「ピアノなど技術」については「練習」があげられている。また、生徒指導については、「生徒の立場に立った指導法を工夫する」「声かけの仕方を工夫する」「言葉遣いと叱り方」「授業をもとにどう叱るべきか考える」など、力の不足を克服しようとする前向きな記述が見られる。

文部科学省の資料「養成機関別新規学卒者免許状取得状況」平成23年3月によると、小学校免許取得者は、大学院卒6.2%、学部卒90.3%、短大卒3.5%。中学校免許取得者は、大学院卒9.2%、学部卒88.7%、短大卒2.1%である。さらに「公立学校採用試験における

学歴別採用者の状況平成23年3月」では、全校種で短大卒は2.6%という状況である。最も短大卒の採用者の多かったのが、ここ近年では平成4年で10%あり、それ以後低下の一途である。今年度の昭和音楽大学・短期大学の卒業生の教員採用試験合格者は14名（全員既卒）その中で短大卒1名（平成24年卒）この割合は7%で全国平均を上回っている。

今回の調査で少数ではあるが、「短大は、学部の人たちより勉強する時間が少ないので個人でやる」と記述する、意欲のある短大生の存在が明らかになった。学部生と比較して、短大生は短所を克服しようとする強い気持ちを秘めているようである。今後は、日々の講義の中で彼らに成就感・達成感を味わわせ機会を増やすことで、より自信を持たせる指導を工夫する必要がある。平成 26 年度から、教育実習、教職実践演習の授業を短大生と学部生合同で実施する。短大生に学部生と一緒に学習や発表させることで、自信をつけさせ、教育実習で学部生と同等以上の成果を挙げられるようきめこまかな指導を心掛ける。また、学部生にとっても短大生の前向きな姿が刺激となると期待する。